

慧思における頓覚と行位の問題

山野俊郎

南岳慧思(五一五—五七七)はその主著『法華經安樂行義』の冒頭において、「法華經者、大乘頓覺、無師自悟、疾成仏道、一切世間難信法門。凡是一切新学菩薩、欲求大乘、超過一切諸菩薩、疾成仏道、須持戒忍辱精進、勤修禪定、專心勤学法華三昧」と述べるように、法華經が頓覺・疾成仏道を説き明かす大乘の法門であり、法華三昧の修学によって諸階位に在る菩薩たちを超過し、速疾に仏道を成就することができると主張している。慧思は法華經の經題釈において、「蓮華」(『法華經の法門』と「余華」)(『二乗および鈍根菩薩の法門』とを比較して、「余華の実を結ぶは顕露にして知り易く、蓮華の実を結ぶは隠顕見難し」と述べるが、これは、二乗や鈍根の菩薩が煩惱を徐々に断除してゆく次第行の道を一地から一地へと歩んで行くのに対して、利根の法華菩薩は一心に法華三昧を修学することによって、煩惱を断ずることなく、次第行を修することなくして一時に衆果を具足し、速疾に仏道を成就するのであり、この法華三昧の頓覺法門が世間において難信であることを意味している。

頓覺を唱える一方で、慧思は既に散失している著書『四十二字門』において、菩薩瓔珞本業經独自の行位説である五十二説(十信・十住・十行・十廻向・十地・等覺・妙覺位)をとりあげ、本經の所説に従いつつ一一の階位について説明していたようである(佐藤哲英『四十二字門』の本文並びに解説—南岳慧思研究にお

ける文献価値について—参照)。彼が瓔珞經所説の五十二位説に注目した理由の一つとして、從仮入空二諦觀・從空入假平等觀・中道第一義諦觀の三觀との関わりから説かれる此の經典の行位説に対し、実践的な立場から関心を持ったことが挙げられる。後に天台智顛は、本經の教説をとり入れ、別教五十二位中の五位(十信・十地)と三觀の修証との関係について、十信位||習從仮入空觀、十住位||証從仮入空觀、十行位||修從空入假觀、十廻向位||修中道正觀、十地位||証中道觀、と説明している。慧思も十住を入空の位と考えていたようであり、二住をもつていわゆる沈空の位と見なしていたようである。また、智顛はこのうち初地已上を無功用の位と規定しているが、一方、瓔珞經では初地・七地は、三觀現前し中道第一義諦慧に住するも未だ有用の位であって、この階位に在る菩薩は造作して功德を修し利他行を行するのであり、八地に至って初めて無功用の位に入ると説かれており、これに關しては、慧思は瓔珞經の所説をそのまま採用していたようである。

階位を一地から一地へと至りつつ次第に進みゆく次第行を二乗や鈍根菩薩が修する方便道であるとし、法華經の不次第・頓覺の法門を主張した慧思において採用された五十二位説は、二乗や鈍根菩薩の方便道の内容を解説する教説であると同時に、頓覺によって成就される功德の内容をも説明するものであると理解することができよう。さて、彼が立てた理想的な頓覺・疾成仏道の行法としての法華三昧行は、瓔珞經の五十二位説について言えば、どの階位への頓入を目的としていたのであろうか。この問題を考えるためには、法華三昧行の帰するところについて考察されねばならない。法華三昧は法華經・普賢菩薩勸発品(または觀普賢菩薩

行法經)にもとづき、文字経巻による有相行、及び同・安樂行品にもとづき無相四安樂行の二種の行法から成る。まず有相行とは、禪定に入らず散心中にあって法華経を誦誦し、法華経の经文に一心に専念するものである。この行法が成就する時、行者は旋陀羅尼・百千万億旋陀羅尼・法音方便陀羅尼の三種陀羅尼を得ることが、法華経・普賢菩薩勸発品に説かれている。慧思はこの三陀羅尼について、初旋陀羅尼 \parallel 從仮入空・具足道慧・入十住位、百千万億旋陀羅尼 \parallel 從空入仮・具足道種慧・入十行位、法音方便陀羅尼 \parallel 入中道第一義諦・具足一切種智・得普現色身三昧・入八地(無功用位)、と理解していたようである。すなわち、法華三昧・有相行を成就して三陀羅尼を具足するとは、瓔珞経五十二位中、無功用位たる八地已上への頓入を意味するものと考えられる。次に法華三昧・無相行は、法華経・安樂行品に説かれる四種安樂行を深妙禪定中において実践するものである。この四安樂行は慧思の命名によれば、(1)正慧離著安樂行、(2)無輕讚毀安樂行(又は転諸声聞令得仏智安樂行)、(3)無惱平等安樂行(又は敬善知識安樂行)、(4)慈悲接引安樂行(又は夢中具足成就神通智慧仏道涅槃安樂行)である。慧思はこのうち(1)正慧離著安樂行の内容については三忍慧(衆生忍・法忍・神通忍)として解説しているが、他の三種の安樂行についてはただ右のような名目を挙げるのみである。この三忍慧中、第三神通忍に関する記述(下、702A-B)は、空を証し、深く空觀に徹するところから無功用なる眞の利他行に出ていくことが不変の菩薩道の道すじであるということを、菩薩のいわゆる沈空の難、及びこの菩薩に対する諸仏の讚歎・勸化とい

う事柄を通して語っているものと理解することができよう。瓔珞経では八地已上が無功用の教化地として説かれるが、本経は十住位を從仮入空の位としていたようであるから、沈空の難は本経において十住位中の出来事であると見なされる。瓔珞経の行位説に依拠していた慧思は、それを二住位における事柄と見ていたようである。即ち、この神通忍に関する記述は、瓔珞経所説の行位について言えば、神通忍の成就が二住位における沈空の難を経て、八地無功用位への進入をもたらすことを述べたものである。以上から、頓覺・疾成仏道の行法としての法華三昧は、瓔珞経所説の五十二位中、第八地無功用位への頓入を指すものであったと見なすことができよう。

智顛も瓔珞経の五十二位説を採用しているが、彼は觀法(三觀)、智慧(三智または四慧)、煩惱(三惑)と行位との関係を整理し、別教五十二位中の十地を、中道を証し、一切種智を具足し、無明惑を断ずる位であるとし、初地已上を無功用位であるとした。さらに円教の行位説においては、瓔珞経の行位説を方便説であると見なし、初住已上の階位を無功用位であると決定するに至ったのである。共に瓔珞経の行位説に拠りつつも、慧思と智顛との間には以上に見るような理解の相違がある。この相違は、慧思においては五十二位と觀法、智慧、煩惱との関係づけが必ずしも明確ではなかったこと、及び瓔珞経の行位説全体を方便説であると見なし、その行位説を克服しようとする意図がなかったことなどに由来するものと考えられるのである。